

医療法人 慈正会 丸山記念総合病院 医療のICT化を推進する 丸山記念総合病院を訪ねて

編集委員 井桁 嘉一



丸山記念総合病院 外観

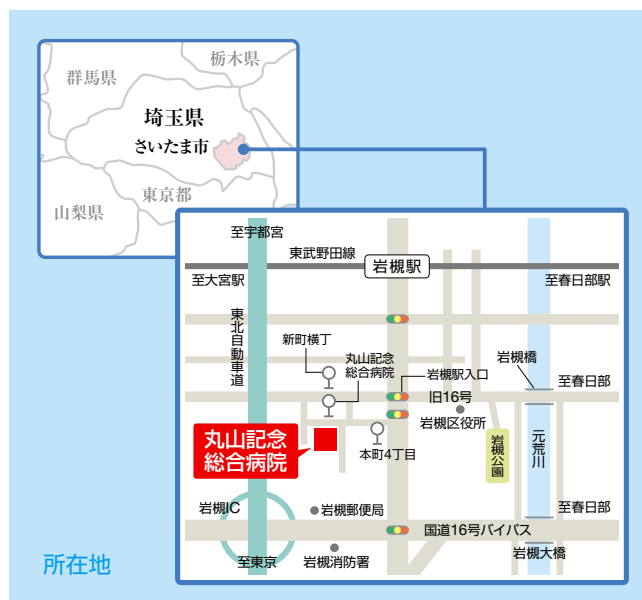
医療法人 慈正会 丸山記念総合病院(理事長 丸山正董 先生)は埼玉県さいたま市岩槻区にあり、明治29年に開設されてから100年以上の歴史を持つ地域に根ざした病院です。2008年3月にWeb型電子カルテシステム「Open-Karte^{*1}」を導入され、その後2009年12月にWeb画像システム「WeVIEW^{*2}」、画像診断ワークステーション「NV-1000」および読影レポートシステム「Natural Report^{*3}」を導入されました。その他にもデジタルX線多目的イメージングシステム「VersiFlex-Apla^{*4}」などを導入されています。

今回は新システム稼動後の状況と今後の病院の方向性などについて、丸山正董 理事長および放射線科 濱守 誠 技師長をはじめスタッフの方々にお話を聞きました。

○はじめに丸山記念総合病院の概要とシステムの導入について丸山正董 理事長にお話を伺いました。

井桁：病院の概要についてお聞かせください。

丸山理事長：丸山家は古くは江戸時代から代々にわたり医業を営んでおり、昭和11年に現在の前身となる丸山病院が開業しました。その後昭和49年までに診療科と病床数を増やし、



所在地

現在では24診療科目、病床241床を有する総合病院として、地域の医療機関と連携した病院運営を行っています。当時から土曜・日曜も通常診療を行っており、また24時間の診療体制を整備し、地域の皆様の安心と安全を見守る病院として貢献しています。外来は1日1,000名にのぼり、そのほとんどが午前中の診察に集中しています。

井桁：最近、病院が力を入れて取り組まれたのはどのようなことでしょうか。

丸山理事長：施設の老朽化に伴い、既存棟のリニューアル工事をきっかけに「東京でできる医療をこの地でもできるように」をコンセプトとし、最新設備の導入と合わせて医事システムおよびオーダーリングシステムについても一新しました。また、放射線科の画像診断装置についても全面デジタル化し、昨年の12月末からPACSによるフィルムレス運用を開始しました。

井桁：今回、医事およびオーダーリングシステムの更新にあたり、重要視された点を教えてください。

丸山理事長：以前のシステムでは薬局や事務・手術・輸血・注射オーダなど、各種オーダをシステム化しようとする、その都度メーカーから莫大な費用を請求されました。まずはそのようなシステムをもう止めたかったのです。そういう視点でシステム検討を行ったところ日立メディコのOpen-Karteは各種部門の業務もすべて1つのパッケージに含んだシステムであるという提案を受け、その点がかなり選定のポイントになりました。また、医事システムがすでに東京女子医大に導入されているものを基本にしている点や、端末もWebベースで利用できる点も評価し、導入を決めました。

ただ、既存システムからの切り替えにあたりデータの移行を完全に行うことを条件に導入を行いました。全てを自動では行えず手作業が発生してしまい、その部分ではお互いに苦労しました。

井桁：確かにシステムベンダーの切り替えにはどうしてもデータの移行作業が発生するため、お客様にもご面倒をお掛けしてしまうことがあります。それを改善するためにもメーカーの垣根を超えたデータフォーマットの標準化やデータ移行のツール整備にこれからも取り組んでいかなければいけないと考えております。

システムが切り替わってから、医事およびオーダーリングシステムは2年9カ月、画像システム(PACS、読影レポートシステム)は約1年経過しましたが、これらの新システムの運用状況はいかがでしょうか。

丸山理事長：まず画像システムのWeVIEWとNV-1000ですが、こちらに関しては導入の効果をかなり感じています。システムを利用するようになってからカンファレンスの内容が充実し、画像もいつでも容易に参照できるようになったことで診断の質は飛躍的に向上しました。また、Open-Karteについても他科の医師がどのような診療を行っているかをその場で参照することができる点でメリットを感じています。最近では自分も他のドクターに参照されることを意識して、コメントは的確かつ簡潔な入力を心がけています。

○医事システムについて医事課の富田 綱 課長にお話を伺いました。

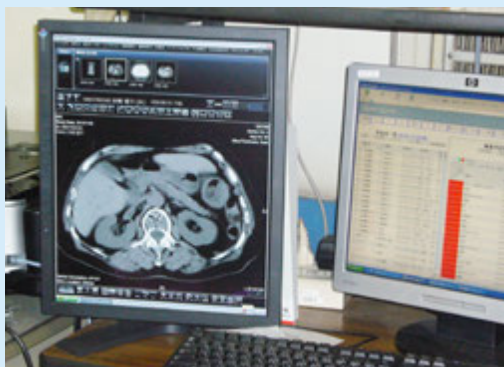
井桁：Open-Karteの医事システムをお使いになってどのような印象をお持ちですか。



丸山正董 理事長



前列左端より放射線科 濱守 誠 技師長、森岡則子 看護師長、松本里美 看護師長、芦葉弘志 主任技師、後列左端より医療情報室 木村裕一 室長、医療情報室 澤野展人 氏、医療情報室 柳 修 係長、医事課 富田 綱 課長



Web画像システム WeVIEW



デジタルX線多目的イメージングシステム VersiFlex-Apla

富田課長：会計入力に関して言えば、オーダーリングシステムとの連携によって処方などのオーダはすべて変換して自動で取り込まれるため、その分の入力作業が削減されました。また、電子レセプトの導入によって格段に残業も減りました。電子レセプトに関しては立ち上げ時にマスタを厚生労働省の標準コードへの変換が必要になり、日立のSEの方と一緒にかなり苦勞して整備を行いました。現在は非常に助かっています。その他にも市町村単位でのカスタマイズなど、いくつか修正の依頼を行い、その都度対応していただいています。

井桁：診療報酬の制度改定はもとより、請求・会計関係については県や市町村ごとに異なる対応が発生するケースがありますが、単に個別のカスタマイズとして改修するのではなく、全国のユーザを俯瞰的に見て、システム側に柔軟性を持たせた改修を行うことで、市町村間における若干の違いは設定等でカバーできるようなシステムづくりを心掛けてまいります。

○画像システムについて放射線科の濱守 誠 技師長および芦葉弘志 主任技師にお話を伺いました。

井桁：WeVIEWをはじめとする弊社の画像システムをお使いになってどのような印象をお持ちですか。

濱守技師長：実は日立のPACSについては導入されるまで製品に関する情報を全く持っておらず、システムに対してかなり不安を感じていました。しかしそんな心配は杞憂に終わりました。PACSが稼働してから約10カ月経過しますが、フィ

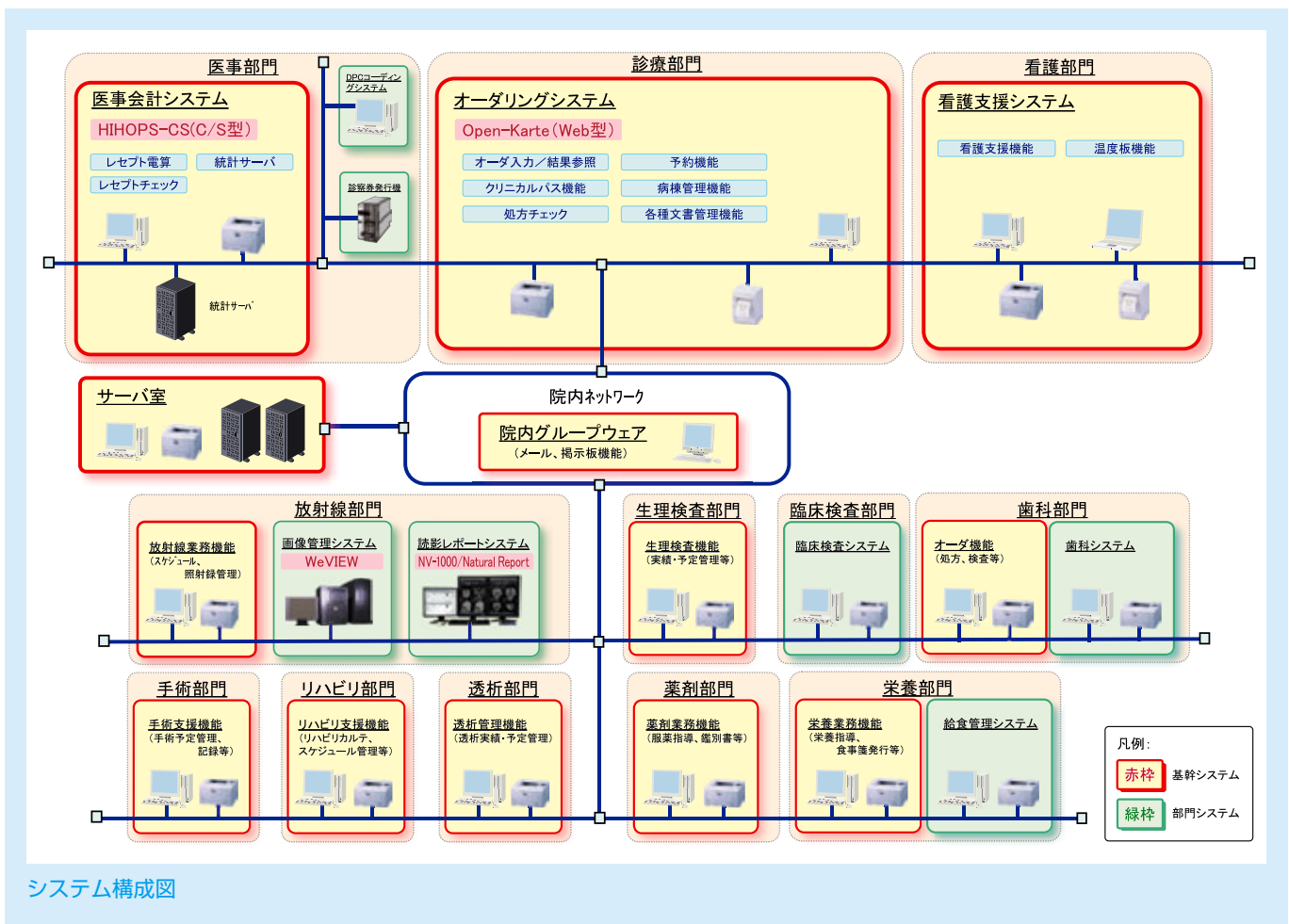
ルムを出力しなければいけないようなトラブルはこれまで一度もなく、今では安心して利用しています。

芦葉主任技師：私も日立のPACSは想像していたよりもかなりできが良いと感じています。稼働を開始してから医師からPACSの操作のことで呼ばれることも数えるほどしかありませんでしたし、医師も使いこなしています。また、オーダーリングシステムやPACSを導入したことによる資源の削減の効果はかなりあったと感じています。依頼伝票は一部シェーマ等の記入が必要なもの以外はほぼ0(ゼロ)になりましたし、特にフィルムレスによる経費削減の効果は絶大です。PACSを早く入れた方が得であるという論文などを今までよく目にしていたのですが、確かにその通りであると実感しています。日々の運用で改善してもらいたい点としては画像データを他院へ持ち出すときに、今はCD-RとDVD-RAMのメディアにしか対応していませんが、ぜひDVD-Rにも対応していただきたい。

井桁：ご提案のありましたご意見については、今後のシステムバージョンアップ項目として検討し、機能向上を図ってまいります。

○オーダーリングシステムについて看護部の森岡則子 看護師長および松本里美 看護師長にお話を伺いました。

井桁：Open-Karteをお使いになって看護部門ではどのような印象をお持ちですか。



森岡看護師長：Open-Karteは、一人の患者に関して各スタッフが入力した情報をいろいろな場所で共有して参照できるので、看護部門としても重宝していますし、システム導入前よりもトータル的には業務時間の短縮につながっていると思います。

松本看護師長：システムが稼働してから2年以上経過し、私たちが稼働当初は見えていなかった使い勝手の面で改善して欲しい点が出てきているので、SEの方との話合いの場を定期的に設けられれば両者にとっても非常に有効な情報交換ができると思います。

井桁：システムをご利用いただいているお客様の声は、何よりも貴重なご意見として承りたいと考えておりますので、お客様の期待値に少しでも近づけられるようそういった場を設けたいと思います。

○システム全体について医療情報室の木村裕一 室長にお話を伺いました。

井桁：今回のシステム更新についてどのように評価していますか。

木村室長：Open-Karteは稼働から2年、画像システムのWeVIEWも約1年が経過しましたが、大きなトラブルもなく、安定して稼働しています。また、細かな点で言えば傍から見ても非常に煩雑に見えていた看護師の書き写しの作業も無くなり、医師からも診断書の作成も楽になったと聞いており、システム更新自体のメリットは各職員とも感じていると思います。ただ、医療情報室の立場として言わせていただくとすれば、システムを運用していくにあたってオーダリングの部分については新規オーダの作成もユーザ側で容易に追加できるくらい自由度があるのに対して医事システムに関してはいまひとつ自由度が足りないという印象で、今後のシステム改善に期待するところです。

○今後の病院の方向性について伺いました。

井桁：病院をシステム化し、より良い環境での患者様への診療を目指されていますが、今後はどのような取り組みを行っていく予定でしょうか。

丸山理事長：Open-Karteがパッケージとして持っている機

能で、病院としてまだ運用できていない機能が残っています。それらの機能のうち、まずは看護記録、看護計画などの看護支援機能について今年度中に運用を開始したいと考えています。その他にも2011年4月の診療分からDPCによる本請求をスタートする計画で、いま準備を進めている最中です。

井桁：今回のシステム更新を終えられて、今後日立メディコに対しどのようなことをお望みでしょうか。

丸山理事長：Open-Karte上での文章入力で感じているのは文字変換機能の変換精度がまだまだ不十分だという点です。当院ではまだカルテの電子化は行っていないですが、今後カルテ用紙を無くし、Open-Karteによる電子カルテ運用に切り替えていくには文脈に沿って文字変換されるような早く正確に入力できるワープロ機能が必須だと思います。ぜひとも改善をお願いします。

井桁：カルテ作成の部分にはいろいろと課題が残っていると思っております。特に年配の方々はキーボードによる入力を敬遠されるため、音声による文字入力なども活用されはじめております。いただいたご意見を実現すべく、今後ともシステムの改善に向けて、技術的な調査を含め検討を進めてまいります。

今回は、丸山記念総合病院において、当社のOpen-Karteをはじめ各種医療情報システムをご利用いただいている丸山理事長およびスタッフの方々にご意見をお聞きすることができました。導入されたシステムの機能をフルに発揮させ、120%活用することで良質な医療を提供しようと前向きに取り組まれている様子を拝見し、大変感銘を受けました。いただいたご意見・ご要望を真摯に受け止め、今後の製品づくりに活かすことで、現場に役立つシステムを提供していきたいと改めて思いました。

ご多忙の中、長時間にわたりご協力いただきまして誠にありがとうございました。

※1 Open-Karte、※2 WeVIEW、※3 Natural-Report、※4 Versiflex、Versiflex Aplaは株式会社日立メディコの日本における登録商標です。



ナースステーション



受付・会計



左から北関東支店 皆川主任、筆者、
メディカルIT戦略本部 立花主任、
メディカルIT営業本部 板垣主任